

タイトル：2019 Middle Eastern and Islamic Studies in Japan: The State of the Art (No.13)

日時：2019年11月29日（金）10：00～13：20

場所：Crowne Plaza Beirut, Hamra Main Street, Beirut

“Role of *zandaqah/ zindīq* in early Islamic theological writings”

田中 悠子 (ロンドン大学 SOAS 博士課程)

本報告会では、アラビア語で異端に関するある種の概念を指す用語である「ザンダカ (*zandaqah*)」およびその行為者を指す「ズインディーク (*zindīq*)」という語が果たした叙史的機能に関する発表を行った。「ザンダカ」はその意味範囲の曖昧さが着目され、先行研究では主に西暦 8 世紀に盛んとなったズインディークらの思想内容とその歴史的文脈が検討されてきた。一方で、これらの用語が後世の著述の中である種の叙史的要素 (*narrative element*) として利用され、著者の目的に資するための様々な性質が付与されたことは、十分に論じられてこなかった。本発表では最近の *Islamic historiography* 研究の指摘を踏まえ、史料中に現れるズインディークを修辞的存在 (*rhetorical entity*) と捉えたうえで、論駁書の中で彼等がどのような機能を果たしているかを検討した。その結果、神学書は実際にはズインディークの思想 (ザンダカ) そのものよりも、それを論駁するに足る資質を持つ著者側の権威を印象づけることに重きを置いていること、従ってズインディークを巡る言説から実際に見えてくるのは、イスラーム諸思想形成過程における権威を巡る諸派の論戦の一端であるということを示した。

以上の発表を踏まえ、コメンテーターである Maher Jarrar 教授 (*American University of Beirut*) からはいくつかの重要な指摘を受けた。それらは主に二つの点に集約される。一つは発表内容を研究史上により明確に位置付けるべきであるということ、もう一つは、用いた各史料それぞれの性質や位置づけをより詳しく論じる必要があるという点である。報告者からは第一点目について、本発表は先行研究に大きく頼っている一方でザンダカの問題を「後世の言説」という別角度から論じようとしていることを言い添えた。二つ目の点は正しく本発表で手薄となっていた点であり、今後の課題として取り組んでゆくこととした。またジャラル教授からは、報告者がまさに指摘したかったズインディーク像を端的に示す表現として、統合的異端イメージを包括する“*proto-type*” な異端者という表現を提示された。これは今後の博論執筆に取り入れることのできる極めて重要な意見であった。また他の参加者の先生方からも、研究をより広い議論に繋げる視点からコメントを受け、全体として多くの学びを得ることができた。

本報告会では近現代研究など、報告者が専門とするイスラーム初期史とは全く違う分野に取り組んでいる若手研究者の方々の発表を聞く機会に恵まれたが、分野は異なる一方手

法の面で参考になる点も多く、大いに刺激を受けた。またレバノンの政情が不安定な中での開催であったが、そのためにメディアで報じられるのとはまた違う現地の一側面を垣間見ることができたのは非常に貴重な体験であった。難しい時期にも関わらず会の開催に向けて尽力下さり、渡航前から現地滞在中、そしてその後の諸手続きに至るまで手厚くサポートして下さいました黒木英充先生、熊倉和歌子先生、篠田知暁先生、千葉淑子様、そしてその他お力添え下さった全ての方々に心から感謝申し上げますとともに、この経験を今後活かしていけるよう、一層研究に邁進していきたい。